

# 狭山ヶ丘分館 図書館だより

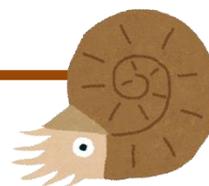
図書館スタッフ

2020夏号

オススメ本



## 化石になりたい



土屋健／著 前田晴良／監修 技術評論社 請求記号：457/ツ

「化石になりたい」と、思ったことはありますか。私はありませんでした。この本を読むまでは。この本は古生物学の分野のひとつである、タフォノミー（化石生成論）をテーマにした本です。いかにも難しそうですが、本を開くとカラー写真・イラストがほとんどのページに入っており、思わず目を奪われます。また、目次の前に「あなたにぴったりの化石診断」があり、チャート式で質問に答えていくと自分の希望にあった化石について紹介している章が分かります。索引には、関連写真も赤字で載っているので自分の見たい写真や読みたいところだけ読むこともできます。

以前読んで面白かった『リアルサイズ古生物図鑑 古生代編』と書いた人が同じ本という理由で手に取ったのですが、読んでいるうちに化石についてもっと知りたくなりました。読み終わった今では、化石になって数万年後の未来人に現代の生活を伝えるのも悪くないと思っています。化石に興味がある人はもちろん、ない人もぜひ読んでみてください。

## ゆっくり、つながる手紙生活



木下綾乃／著 サンマーク出版 請求記号：B693.04/キ

手紙好きで知られるイラストレーターが、手紙にまつわるエッセイや、可愛いポップアップ封筒、カードの作り方や、書き方のマナーなどを書いた本です。作者は手紙について、「書き手の気分で選んだ封筒、便箋、切手はその人の気配をまとっている。手書き文字は、フォントと違い、関係や状況によって表情を変える」と書いています。同じメッセージでも、メールやコミュニケーションアプリで受け取るのと、手書きの文字で読むのでは、印象が違ってくるような気がします。手紙用品を扱っているお店の案内もあり、読み終わったあとは、手紙を書きたくなる1冊です。外にあまり出られない、人と会えない今だからこそ、ゆったりとした気持ちで手紙を書いてみませんか。

# 無貌の神

恒川光太郎／著 KADOKAWA 請求記号：B913.6/ツ

恒川光太郎さんといえば、2005年に日本ホラー小説大賞を受賞した『夜市』が有名ですが、今回ご紹介する『無貌の神』は“夏の夜”におすすめのダークファンタジーです。

標題作である『無貌の神』を含む、全6編で構成されています。どの話も時代や背景がバラバラの本作ですが、それぞれ共通しているのは、無いようでいて、でもありそうな異世界の存在です。少し背筋が涼しくなるような話もあり、全く先の展開が読めない点も魅力の一つです。

ちょっと不思議な恒川光太郎作品の世界を覗いてみませんか？

## ねにもつタイプ



岸本佐知子／著 筑摩書房 請求記号：B914.6/キ

翻訳家岸本佐知子さんによる、現在も筑摩書房PR誌「ちくま」に連載中のエッセイ「ネにもつタイプ」を書籍化した本です。エッセイというと、自分の身の回りのことを綴った作品をイメージしますが、この本には作者の妄想・夢想から生まれた、ショート・ショートのような奇妙な味わいの不思議なおはなしが詰まっています。たとえば、止めた覚えのない目覚まし時計が勝手に止められているのを見つけた時。私自身もたびたび経験している出来事ですが、岸本さんはこう考えます。「ただ。またしても妖精にやられた。」日常のささいな疑問点や違和感から次々と作者の妄想がふくらんでいき、次第にシュールな状況に発展していく。一度読めばクセになる“キシモトワールド”。文庫版のカバー裏表紙には「読んでも一ミクロンの役にも立たず、教養もいっさい増えないこと請け合いです。」と書いてありますが、くすっと笑いたい方にはおすすめできる妄想系エッセイ集です。

## 私の息子はサルだった



佐野洋子／著 新潮社 請求記号：914.6/サ

この本は『100万回生きたねこ』の作者である佐野洋子さんが、同じく絵本作家の息子である広瀬弦さんについて書かれたエッセイです。佐野さんは生前、息子さんとのエピソードを原稿用紙に何枚も書かれていたそうです。幼い息子との他愛のない会話や、友達との愉快的やり取り……。広瀬さんは、書かれているすべての事を覚えていないかもしれませんが、母親である佐野さんにとっては原稿用紙に書き留めておきたい、貴重な出来事だったのでしょう。私はその内容から、佐野さんの深い愛情が感じられましたが、広瀬さんは不満があるようで「この話は佐野洋子が一方向的に書いた僕の記録」「言いたい事は山ほどある。」と巻末に書かれていて、思わず笑ってしまいました。しかし佐野さんが亡くなってから「そろそろいいか」「許してやろう」と思い、これらの話を誰かに読んでほしいと密かに願っていた佐野さんの思いを、本にして叶えてあげています。ステキな母子だな、と思いました。